

## 第5回放射線管理士セミナー 印象記

神奈川県放射線管理士部会

### 【I. 演題①～③】

- ①神奈川県技師会と県の取り組みについて
- ②神奈川県放射線管理士部会活動報告
- ③福島県診療放射線技師会活動報告～放射線管理士の活動を中心に～ を聞いて... 】

横浜旭中央総合病院 放射線科  
鬼頭 菜穂子

8月31日に第5回放射線管理士セミナーが郡山市で開催され、参加をしました。  
今回は、福島県と神奈川県の放射線管理士部会・放射線技師会の取り組み、サーベイ実習・特別講演・グループワーキングと、今まで以上に盛り沢山の内容でした。

演題①～③で講演のあった『各県の取り組みや活動報告について』を聞いて感じたことは、各県それぞれ市民の方と向き合うことに努力をし、年に何回か研修や講習会を開催しており、放射線管理については技師が積極的に対応しなくてはならないという気持ちを持っていることでした。

また行政との連携も活動においては重要であると感じました。

実際震災時、原発事故が起こったあと、神奈川県がすぐにサーベイヤーパー派遣の対応ができたのは、普段から講習会等で訓練を重ねてサーベイヤーパーを習得しており、原子力災害派遣の整備がされていたからです。福島県の方々も事故後すぐ要請を受け、サーベイ活動に従事しており、サーベイヤーパーの対応についてのマニュアルを直ぐに作成して下さっていました。この指標はその後派遣された技師にとって、情報がない状態でもあり、とても役に立ったのではないかと思います。

技師だけでなく、福島県の原子力災害への取り組みについてもお話がありました。特に郡山市についてでありましたが、放射線からの健康管理や、食の安全・モニタリング・除染・放射線を正しく理解する為の講習会など多岐に渡っていました。確かにどれも必要なことばかりでしたがその幅の広さに改めて驚きました。市民の方々がこれらを利用している人はそれほど多くはありませんでしたが、認識されている方はかなり多く、我々技師もしっかりとした知識を持って活動しないといけない事を再認識しました。中途半端な知識や気持ちで被ばく相談等の活動をする事は、かえって市民の方々の不安をあおるだけであると感じ、身が引き締まりました。

最後は、J-VILLAGE や被災地の様子でしめくられていました。歩道橋に掲げられた横断幕の『福島は負けん!!』という言葉を見たとき、やはりぐっときました。難しいとはわかっているけど一日も早くもとの生活に近い状態に戻れることを願ってしまいます。

3人の講師の方のお話は、原子力災害時の放射線技師の役割や活動についての指標となったと思います。私も今後の活動に生かしていきたいと思います。

【Ⅱ. 実習 (セグメント法)・特別講演 (福島県における放射線教育の現状～正しい知識を伝える難しさ)を聞いて】

川崎市立川崎病院

齋藤 敦子

8月31日に開催された「第5回放射線管理士セミナー」に参加しました。東日本大震災後、このセミナーが福島県で開催されたことには大変意味の深いものを感じます。今回はNASチーム考案のセグメント法の実習に加え、特別講演として、田村市立美山小学校の齋藤孝之先生に貴重なお話をして頂きましたので報告します。

まず実習は、参加者のほとんどが、3分間で行うこのセグメント法を知っているという状況でスムーズに行われました。ですが、サーベイメータの目盛りを見ながらサーベイを進めるということは、アラームを切っているためにより難しく、各施設においての日頃の訓練が必要だと感じました。たくさんの注意点を実感出来たことはとても良かったと思います。

特別講演として齋藤先生には、「福島県における放射線教育の現状」というタイトルでお話頂きました。私は今回、教師という立場からのお話を聞けたことが、もっとも大きな収穫だと思っています。

学校でのさまざまな現状を教えてくださいました。窓を閉め切ることインフルエンザが流行し学級閉鎖になったことや、長い廊下や空いている教室を使って行われた体育の授業の話、避難をする生徒たちのお別れ会が連続して行われたことなど、生々しいお話を悲痛な表情で伝えて下さいました。

学校の先生たちが何を一番心に留めていたかという、「親とどれだけ同じ気持ちで教育出来るか」だったということです。生徒によって、○○を食べない、××を飲まないなど、家での方針がどのようなかを思わせる状況にたびたび出合ったと仰っていました。先生たちは「親の考え第一、それに寄り添う」「己の意見は捨てましょう」という信念のもとで子供たちと接してこられたそうです。「そういう考えで出来ないなら、去って下さい」とまで言ったそうです。なんという強い覚悟だろうと思いました。「生徒に教えるというスキルはあっても、放射線に関する専門的な知識がない」という中で、必死に考え、必死に生徒と親と向き合って頑張っただけを思うと、胸が熱くなりました。

福島県の皆様と一緒に、今回のセミナーを受けることが出来、大変勉強になったのと同時に、大変貴重なお話を聞かせて頂いたことを本当にありがたく思います。これからもこのような機会には積極的に参加し、その中で、自分には何が出来るかということを常に考えていくことが非常に重要であると強く思いました。

【Ⅲ. グループワーキング「被ばく相談について考えよう～福島第一原発事故災害に係る市民の方からの質問にどう対応しますか?～」に参加して】

医療法人山内龍馬財団 山内病院  
後藤慎一

サーベイ実習・特別講演に続き、「被ばく相談について考えよう～福島第一原発事故災害に係る市民の方からの質問にどう対応しますか?～」をテーマとしたグループワーキングが開催され、神奈川県放射線管理士部会メンバーのアドバイザーとして参加しました。

福島第一原発事故に関し、避難住民から多く寄せられた質問を取り上げ、どのように説明・対応をしていくかをグループワーク形式で討議、各質問に対して「何を不安に思っているかを明らかにする」「不安要素を踏まえ回答を考える」の2つの過程を経て、放射線管理士である診療放射線技師としてどのように回答するか討議しました。

グループの討議の中では、福島県内における市民向けの食品測定の活用や、除染の効果・実施基準などのお話を伺うことができ、また40分の長い討議時間が設定されましたが、ほとんどのグループで時間が足りないほどに活発な議論が行われ、参加者の意識の高さを感じました。

続く発表・総括では、発表者の迫真の演技と福島の方言を交えながらの発表もあり、これは相談者と同じ目線に立つべきとの、発表者の熱いメッセージとして受け取りました。

私はこれまでの間、神奈川県放射線技師会が開催・共催するイベント等や、勤務先にて、被ばく相談を行ってきました。それらは福島県から遠く離れた神奈川県における福島第一原発事故の被ばく相談や、患者に利益のある医療被ばく相談でしたが、今回のグループワークで提示された課題は、避難住民や福島県内在住の方々における、目の前にある危機としての被ばく相談であり、被ばく相談の重要性を再認識しました。

被ばく相談には、幅広い放射線の知識と心理学の基礎知識、相談者に親身になって共感する心が必要なのは基本ですが、今回のグループワークを経て特に思ったことは、幅広い放射線の知識には信念が必要であるということ。即ち、自らが持つ知識が正しいと判断できる知識こそ必要だということ。

様々な考えを持つ人がいるなかで、信念を持って被ばく相談に臨めなければ、相談者に伝えられるはずがなく、被ばく相談は意味をなくしてしまう。そうならないためにも更なる知識の獲得は重要であり、それが信念へつながるものと思いました。